論文要旨

# 清盛の死から読み解く中世のカミ信仰

東北大学大学院文学研究科文化科学専攻

赤谷　正　樹

山川草木にも「カミ」を感じ取る日本人の祈り観は、人類共通の本能的な信仰を今にとどめているともいえる。平安貴族は神祇・仏教・陰陽道など複数の宗教と関わりながら、その時々の必要に応じて有効な「カミ」を選択してきた。とりわけ源信の『往生要集』を契機に、十二世紀前期に全盛期を迎えた浄土教信仰は、古代的な一元的世界観を、彼岸と此岸という二重構造に変えて、現代に至る日本人の「心」の源流となった。

浄土教思想については、先学の優れた成果によって明らかにされてきたが、これまでの研究の多くは、宗学的観点に力点が置かれ、思想の大転換の時代を生きた人々の信仰の姿はなかなか見えてはこない。

本研究では、鎌倉時代から室町時代にかけて形成された『平家物語』諸本の「清盛の死」を手がかりに、日本人の「心」の画期であり、史上最大の「不安の時代」であった末法を生きた人々のカミ信仰の実像の一端を明らかにする。

第一章「龍宮城から見た『平家物語』成立の時代」では、壇ノ浦に果てた安徳天皇や平氏一門の供養をする建礼門院（平徳子）の姿を『平家物語』諸本で対比し、中世初期という激動の時代に翻弄されながらも、着実に定着していった浄土教思想が、やがて供養も苦行から易行に変えていったことなどを明らかにした。

第二章「清盛の遺言」では、これまで「われいかにもなりなん後は、堂塔をも立て孝養をもすべからず」、「頼朝が首をはねて、わがはかのまへに懸くべし」という部分が注目されて、「猛き人」清盛ならではの遺言と捉えられ定説化してきた。しかし、古態をとどめる延慶本と長門本には、「頼朝追討の志を先とすべし、仏経供養の沙汰に及ぶべからず」との一文がある。これを前章で明らかにした諸本間の浄土思想の変遷に照らすと、遺言は頼朝の追討が成就するまで供養を一時的に停止しただけで、決して清盛が供養を拒否したのではないことがわかる。こうした停止の条件も、人々の地獄の恐怖が薄らぐ中で存在意義を失い、覚一本などから姿を消していったと解されるのである。

第三章「清盛の死因」では、清盛の腹心として辣腕を振った藤原邦綱の人生に着目して、相前後して死んでいった必然と、その死因を明らかにするとともに、「現世安穏、後生善処」を願って死んだ清盛と、法然を善知識として新たな浄土教思想に来世を託した邦綱との往生観の違いに、古代から中世に移行する思想的分水嶺を明らかにした。

第四章「清盛の墓所」では、未だに「八棟寺説」と「播磨国山田の法華堂説」に二分する清盛の墓所について、思想史的な考察を加えるとともに、地震学や砂防学の研究成果を活用しながら多角的に検証し、清和天皇の勅命によって慈覚大師円仁が建立した「多聞寺」が創建時に建っていた舞子丘陵頂上付近が最終的な墓所であると推定した。

第五章「慈恵に生まれ変わった清盛」では、『平家物語』諸本が、権力を手中に納めた清盛を悪逆非道な武士の棟梁として描きながら、死をきっかけに「抑（そもそ）も、入道、最後の病の有様はうたてくして悪人とこそ思へども、実（まこと）には慈恵大師の御真なりといへり」と、筆致は一転する。比叡山の「中興の祖」といわれる高僧慈恵は、後白河院が発した延暦寺攻撃の院宣を「治承三年のクーデター」で食い止めるために清盛に生まれ変わったとするが、そこには専修念仏などの新たな仏教思想の台頭に対抗できる比叡山自身の中世化の危機が潜んでいた。浄土宗などに対抗して、広く信仰を集めるためには、比叡山随一の霊威を誇った慈恵に、新たな伝説を加えて、新時代の天台護持を託したのではないだろうか。

第六章『ヒトガミ』になった清盛」では、日本の国宝と重要文化財に指定されている肖像彫刻の中で最も古い、六波羅蜜寺（京都市）の「伝・平清盛坐像」が、右胸の前で開いた経巻に着目して、清盛が「ヒト」から「カミ」となるために、絶大な霊力を秘めた経巻を神聖化の装置とし、以後の「ヒトガミ」像の嚆矢となったのではないかと推測する。

終章『『カミ』を創造する『ヒト』」では、近年、私たちを取り巻く、大震災や火山噴火、異常気象による災害をはじめ、高齢化や少子化、さらには身近な人間関係などと、様々な「不安」の解消に『平家物語』の時代が何らかのヒントにならないかを考えてみた。

平安末期から鎌倉時代にかけての史上最大の「不安の時代」にあっても、専修念仏などによって、地獄の恐怖を克服し、さらに供養まで易行化するなど、真摯でありながら現金なほど柔軟な人々の生き方に、現代人の生きるヒントを模索すべく、現代における「カミ」を取り巻く諸相を概観して、本研究の締めくくりとした。

論文審査結果の要旨および担当者

| | |
|---|---|
| 提　　出　　者 | 赤谷　正樹 |
| 論文審査担当者 | （主査）教授　　佐藤　弘夫<br>教授　　佐倉　由泰<br>准教授　片岡　龍 |
| 論　　文　　名 | 清盛の死から読み解く中世のカミ信仰 |

本論文は、『平家物語』諸本の比較検討を切り口として、多彩な資料を援用しつつ、中世の信仰世界の特質とその変容を解明しようとしたものである。「序章」では本論文の構成について論じ、執筆目的が、『平家物語』の諸本の対比等を通じた中世人の「カミ」（超越的存在）信仰の実像の究明にあると述べる。

「第一章　龍宮城から見た『平家物語』の時代」は、神仙思想において理想郷と考えられていた龍宮城が、『平家物語』では畜生道の異界とされるに至った思想的背景を探るとともに、輪廻思想の定着に伴って、再び理想郷としての地位を取り戻していくそのプロセスを論じる。「第二章　清盛の遺言」は、史上の清盛は浄土信仰の世界を生きており、後生を恐れない清盛の豪胆な人物像をもっともよく示すとされるその遺言の真意も、決して往生を拒絶したものではないとする。

「第三章　清盛の死因」は、清盛の死因は高倉上皇→邦綱→清盛と伝染した猩紅熱によるものであること、この伝染の経路に当時の宮中の人間関係を読み取ることができること、同じく浄土信仰を持ちながらも清盛と邦綱の往生観は対照的なものであったこと、を論じる。「第四章　清盛の墓所」は、死後六波羅で火葬に付された清盛の遺骨が、その後都落ちした平氏一行と運命をともにしながら、最終的には山田荘舞子丘陵にあった多聞寺に納められたことを、現地調査に基づいて推定する。

「第五章　慈恵に生まれ変わった清盛」は、平安時代後期に信仰の民衆化という課題を負って慈恵大師信仰がクローズアップされてくる過程を明らかにするとともに、清盛が慈恵大師の生まれ変わりとする言説がなぜ生まれたのかを考察する。「第六章　「ヒトガミ」になった清盛」は、六波羅蜜寺の伝清盛像を素材として、清盛が中世に一般的であった本地−垂迹の論理とは異なる形で、子孫の守護者としてヒトガミ化されていったことを指摘する。

「終章　「カミ」を創造する「ヒト」」は、なぜ人はカミを生み出し続けるのかという自問に対して、諸先学の見解を引用しつつ解答を探求するとともに、カミのあり様を生々しく描き出した『平家物語』から、現代人は何を学ぶことができるのかという問題を論じている。

本論文は、『平家物語』諸本に止まらない日記・古文書等の多様な文献史料に加えて、砂防学・地震学や現地調査の成果など多彩な資料を援用して、従来の『平家物語』研究や思想史研究では描き出せなかった、あるいはそれとは異なる、新たな歴史像の構築を試みている。まだ仮説段階のものもあり、すべての論証が十分な説得力を持っているとは言い難いが、スケールの大きな中世像を描き出そうとする提出者の試みは学術的価値を有するものと判断される。

特に平清盛の死因については、医療関係者が注目するような新説を提示しており、本論文の成果は斯学の発展に寄与するところ大なるものがある。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。